

CROI2017 派遣事業参加報告書

順天堂大学医学部附属順天堂医院総合診療科

平井由児

今回は CROI に参加し、臨床・疫学・社会学・ウイルス学（新規薬剤開発含む）を含め、多様な知識の導入と今後への実践を含め参加できたことは大変有意義に感じております。この機会を少しでも HIV に苛まれる人々に還元できるよう今後も努力して参ります。関係者を含めこの書面にて御礼を申し上げます。

【自身のかかわるテーマ】

HIV 患者における依存（合法/非合法薬物・アルコール・喫煙）については、十分な疫学的調査が行われておらず現状把握が困難である。実際に HIV 患者の診療では特にアルコール・薬物への依存により HIV 自体の治療が困難であることは珍しくない。特に静脈注射による薬剤使用者（セッションでは PWID と表現）は犯罪とも直結することは明らかである。

“ HIV AND SUBSTANCE ABUSE: DOUBLE TROUBLE ”（2017.2.16）においては NHBS の疫学調査に基づき薬剤の種類にかかわらず‘自己注射’を経験するきっかけや依存の状況について人種・sexuality・受けた教育レベルにまで言及し報告されていた。

オピオイド系薬剤の医療機関からの処方も潜在的 PWID を増加、結果的に HIV 患者を増加させる要因になっている可能性が考えられた。地域レベルでの疫学的介入や現状報告も含め、東京でも同様の状況がすぐに（もしくは既に）起こり得る状況であり、オピオイド依存について地域を挙げて MAT（Medication assisted treatment）を行う San Diego での現状についても、早期介入の重要性や、現存の PWID を減らすことによって新たな PWID を抑制できるという明確な計画のもとで行われていることも大変参考になった。薬物自体に目を向けるとメタアンフェタミン使用者の疫学的な変化が示されており、従来での MSM での使用者数は頭打ちになっているものの、non-MSM（ヘテロセクシャル）で、男女を問わず使用者の急激な増加が示されている。我が国（特に筆者が診療を行っている東京）での医療機関・行政を含めた包括的な対応の必要性を強く実感できた。

【参考となった研究発表】★で評価

Poster session

★★No.862; HIV AND SYPHILIS COINFECTION IN MEN WHO HAVE SEX WITH MEN, BANGKOK, 2005–2016

★ No.442; LONG-TERM SAFETY AND EFFICACY OF CAB AND RPV AS 2-DRUG ORAL MAINTENANCE THERAPY

★★★ No.458; PROMISING RESULTS OF DOLUTEGRAVIR + LAMIVUDINE MAINTENANCE IN ANRS 167 LAMIDOL TRIAL

Oral session

★ No. 56; SYPHILIS IN THE ERA OF TREATMENT AS PREVENTION AND PRE-EXPOSURE PROPHYLAXIS

★ Alternatives Cytology; IMPACT OF ART COVERAGE AND SCREENING ON ANAL CANCER IN HIV+ MEN WHO HAVE SEX WITH MEN

★ New Discoveries in HIV pathogenesis; Efficacy of HIV-1 Monoclonal Antibody Immunotherapy in Acute SHIV-Infected Macaques

★★★ Thursday Plenary Session; IF YOU CAN MAKE IT THERE: ENDING THE HIV EPIDEMIC IN NEW YORK

【会議の成果】

感染症関連の国際学会（IDSA/ECCMID）では HIV 関連のレクチャーや発表はごく一部であり、CROI は clinical trial、基礎、日和見感染症、公衆衛生学・社会学と HIV に特化した学習効率の高い学会と表現でき、自己の specialty や臨床現場での疑問を解決できる機会が多くあった。

また、oral/poster session についても特に臨床研究デザイン・統計解析方法も含め、本学会のクオリティの高さを実感する機会となった。また、これまでは教科書的、もしくは総説レベルの理解であった Virology の新たな知見や新規薬剤についても、ウイルスの特徴（指向性）と新規薬剤（特に長期作用薬・MoAb）等は今後の HIV 診療を行う上で大きな期待が持てる内容といえた。

また、米国での PrEP の現状については、従来の TDF/FTC 以外の長期作用型予防薬の可能性も含め、より日常的になりつつあることが理解できた。特に NYC の公衆衛生については Thursday Plenary Session; IF YOU CAN MAKE IT THERE: ENDING THE HIV EPIDEMIC IN NEW YORK における PlaySure ならびに Play Sure Kit について youtube や SNS を介した広報活動についても知ることができた。

IHV 診療における予防・医療・公衆衛生の連携が重要であるということを学会のプログラム自体が示しており、より受け手側のニーズに即した学会であるといえる。

また、Zika や同じレトロウイルスである HTLV-I についてのセッションもあり HIV の見地から HIV 以外の知識を広げるきっかけになった。

【感想全般】

1) 応募まで

申請には程度の実績が必要とされることもあり、特に若手が応募するにはハードルが高いと感じました。このような助成は収入面でもこれからの学年にチャンスを与える意味もあると思います。モチベーションの高い若手（専門施設か否かにかかわらず）にも選択される機会がもたらされればと思いました。

2) 学会登録

学会登録とホテルの選択が一元化しており、さらに、ホテルの選択肢の中にリーズナブルなホテルがありませんでした。学会会場の近くには指定ホテルの3分の2前後の価格で宿泊できるホテルもありましたが、学会でのホテル選択肢に含まれておりませんでした。学会事務局に経済的理由で指定以外のホテルへの宿泊の許可を求めましたが認められませんでした。今後もホテル予約と学会登録がリンクするのであれば補助金額に加えそれなりの金額が必要となります。この点については今後の参加者に対する情報共有や、補助方法の検討が必要と思われました。

3) 学会内容

学会内容は HIV 診療の現状や現在行われているスタディ、新薬、ウイルス学と包括的に HIV 診療を学べる大変良い機会でした。予防財団からの依頼のございました懇親会については開催されたのか否かはわかりませんでした。

ご指摘のとおり参加者のつながりは重要であり、時間的にはタイトであることは否めませんが補助対象者名簿の共有や対象者を全員集めたミーティングなどの機会があればと思います。

4) 今後に期待すること

大学病院や一般病院にかかわらず、財団からの補助対象者として選択されたとしても職場の休暇の問題などで参加が困難なケースもあるかと思えます。より早い段階で補助対象者を決定できるプロセスがあればと思います。